

【佳作】

『白磁の人』を読んで

渡辺 優香里（東京都 田園調布学園高等部 1年生）

朝鮮を愛し、朝鮮の人々に愛された日本人、浅川巧。この本を読み、私は今までなぜこんな人がいたことを知らなかったのだろうと思った。またそれと同時に早いうちにこの人の生き方、考え方を知ることができて良かったとも思った。

正直、私は伝記として昔から語り継がれている偉大な人々の話に感銘を受けたことがあまりない。もちろん彼らの考えていたことや成し遂げたこと、そのための努力は素晴らしいと思うし真似したいとも思う。しかし伝記の中の人々は小さい頃から少し変わっていたり、才能があったり、偉大なことを成し遂げていたりと身近に感じることができなかった。そのためいつも伝記を読むと、私とは違う、特別な人だったからこんなことができたのだと考えていた。

しかし今回『白磁の人』を読み、この本の主人公である浅川巧を特別な人だとは感じなかった。彼は今まで読んできた伝記の中の人々とは違う親しみやすい人だと感じた。また素直に浅川巧のように生きていきたい、彼のような人間になりたいと思った。

日本人として生まれた浅川巧は二十三歳のとき朝鮮の地を踏んだ。そして日本で造林技士として働いていた経験で朝鮮総督府の

役人を買われ、林業試験場で仕事を始める。荒廃してしまった朝鮮の山を元の緑色に戻すためだ。また浅川巧は韓国併合が行われていた時代に生きていた。簡単に言えば朝鮮という国が日本という国になってしまったのだ。そのため朝鮮人は母国語ではない日本語を話すことを強要されていた。林業試験場では浅川以外にもたくさん日本人が朝鮮の人々と働いていたが彼らは当たり前のように朝鮮人に対し日本語を使っていた。

しかし浅川は朝鮮のことを知るためには朝鮮の言葉を話すことが大切だと考え、朝鮮語を習得した。

また韓国併合のせいで朝鮮ならではの焼き物や文化などもなくなりつつあった。そんなとき彼は「白磁」という朝鮮独自の焼き物に心を奪われる。白磁や朝鮮が大好きになった彼はなくなりつつある朝鮮独自の文化を未来に残すために奮闘する。

前にも書いたが当時は韓国併合で朝鮮という国で朝鮮の人々は日本人に怯えていた。この本によれば、日本人、主に軍人は電車の席に朝鮮人が座っているとその朝鮮人を立たせそこに座るなど、日本人が朝鮮人を前に威張り散らす時代だった。

そんな時代の中、浅川巧はどうだっただろう。彼はそんな人々とは全く逆だった。日本語を使う人々の中で朝鮮語を話すということからも分かるだろう。浅川巧の祖父の「人間の仕事には貴賤などない。人種などというものにも上下はない。人の価値はな、どう生きたか、にあって地位や金銭ではどうにもならん。」という言葉のようにどんな人とも同じような温かい態度で接した。

私は浅川巧という人間の生き方を知り、自分の今までの過ごし方が恥ずかしくなった。もちろん目に見えるような差別をしたことはない。が、心のどこかで人を見下してしまったり、この人は

私とは違うと差別してしまったことがあるからだ。

そんな私とは違い浅川巧の言動、態度、人からの慕われ方、これらを読めば彼がどれだけ人と対等に過ごしていたのかがよく分かる。

また、彼は日本人でも朝鮮人でもどんな人からも愛された。それは朝鮮という国を先入観で見るとはなく、朝鮮の言葉に勉強し文化を知ろうと努力する姿勢や、目の前の人と常に真摯に向き合う彼を知れば好感を抱くのも当たり前のことだろうと思っただ。

これらのことから分かるように彼はいつの時代であってもそう簡単にはできない生き方をした。

私はいつも何か新しいことに挑戦しようとするときや知らない人と出会うときマイナスなことばかり考えてしまうし、やる前から勝手にきつこうだろうと決めつけてしまう。しかし浅川巧の生き方、考え方を知り、人や物事を自分の小さな物差しではかることがどれだけ無駄なことなのかがとてもよく分かった。これからは彼の口癖だった「世界は出来るだけ広くしてゆっくり住むに限る。」という言葉のようにいろいろなことに挑戦し、自分の世界をもっと広くしたい。そして周りに流されることなく、常に自分をしっかりと持って行動できるように人間になりたい。

書名…白磁の人

著者…江宮 隆之